

## シーア思想 — シーア派とイスラーム

(1/2)

非ムスリムと改宗ムスリムを最も困惑させる問題の一つに、シーア派とスンニー派間の分裂が挙げられます。そして双方共に自分たちこそが真のイスラームに従っていると主張していることが、更に一部の人々を混乱に陥れるのです。この問題について完全な理解を得るためには、イスラームの歴史をその揺籃期から検証し、この分裂がどのような状況において始まったのかを見て行かなければなりません。ほとんどの人々はこのような手段を有しません。それで一般人に残された別の手段として、どちらがイスラームの教えにより忠実であるかを分析するという仕事が残されることとなります。それでは神によって啓示された言葉である聖典クルアーンと、スンナ —

預言者ムハンマド（彼に神の称賛を）の教え-という原典による証拠と照らし合わせつつ、スンニー派とシーア派をその信条と実践において比較してみましょう。

多くの場合、人々はこの問題を大きな分裂であると見なしがちです。しかし実際のところ、シーア派は歴史的な重要性のある政治的地域を制圧していたにも関わらず、全ムスリム人口においては僅か8パーセントを構成するのみです。そして“シーア派”とは分裂ではなく、本来のイスラームの純粋な教えから離れた種々雑多な集団のことを指しているのです。他方いわゆる“スンニー派”とは分派ではなく、シーア派やその他の異端派から区別されるよう名づけられた、単なる名称に過ぎません。

“スンニー派”という言葉は前述のように、預言者ムハンマドの教えである“スンナ”という単語から来ています。彼らはこの教えに従うことに関して厳格であり、そこにおいていかなる導入や改竄、削除なども行いません。一方“シーア派”という言葉には“一団”、“宗派”、“支持者”、もしくは“同様の考え方を持つグループ”という意味があります。神はクルアーンの中で、預言者ムハンマドに対しこう仰っています：

“彼らの教えから離れて分派（＝アラビア語でシーア）した者に就いては、あなたは少しも関わりはない。彼らのことは、アッラーの御手に委ねよ。かれはその行ったことを、間もなく彼らに告げ知らせられる。”（クルアーン 6:159）

この節では、シーア派と呼ばれる特定のグループのことを名指ししているわけではありませんが、一般的にそのような分派全てが包括されています。

歴史の紐を少し解いてみるとシーアという言葉がムスリムによって初めて使われ出したのは、預言者の死後37年後に発生したある政治的問題におけるムスリム間相違の折であったことが分かります。実際シーア派は彼らの起源をその出来事に結び付けていますが、現実的に“シーア派”という言葉がこの宗派のことを意味するようになったのは、歴史上もっと後のことです。いずれにせよこの名称は預言者時代には全く聞かれなかった言葉であり、それゆえにシーア派は預言者の死後に現れたグループであると言うことが出来ます。

さてシーア思想における長い発展の過程において、彼らは多くの外来観念を取り入れて来ました。預言者の従兄弟であるアリーのある種の政治的見解を他の教友たちのそれよりも尊ぶことによって始まり、本来のイスラームとは一風趣を異にした不自然な観点を有する宗派になったのです。これは、この観念が人々によって信奉された場所がイスラーム学問の中心からは遠く離れたペルシャの地であったことが一つの大きな理由であり、またそれらの人々がまだイスラームに出会って間もなかったり、あるいは体面上イスラームに改宗した人々であったり、もしくは大半の人々がまだ過去の宗教に留まっていたような地域に住んでいたりしたかのいずれかによっています。それゆえシーア派は外来観念が容易に導入されやすい土壌となり、また彼らはそれらをイスラームが堅持しているある種の観点や信条の中に苦心の末に取り込み、その結果ユダヤ教やゾロアスター教、そしてイスラームに基づいた思想から成立する一つの宗派が誕生したのです。ゆえにシーア信奉者たちが訪れるシーア思想における最も重要な寺院の一つが、第二代正統カリフ・ウマルの時代の後に死去したゾロアスター教徒アブー・ルッアのものであったとしても全く驚くには足りません。、それは現在のイラン領内のカシャーンという都市に存在しています。このことに関連し、フランス在住のイラン人シーア派研究者、ムハンマド・アリー・ムズビーは次のように述べています：



### (The Shrine

Picture:シーア信奉者たちによって崇敬されている、イラン・カシャーンのアブー・ルッルア・ゾロアスター教寺院。)

“ゾロアスター教の根本教義は、シーア思想の細かな部分にまで入り込んでいます。・・・そしてこれはシーア派と古代イランのマギとの親交関係に現れているのです。” [1]

それでは、シーア思想の信仰についての側面を簡潔に見ていきましょう。これらの例によって、私たちはそれが預言者ムハンマドによってもたらされた本来のイスラームの教えから、いかに離れ去ってしまっているかを理解することが出来るでしょう。

まずイスラームには特定の信仰箇条があり、そこから様々な信条が枝分かれしています。そして次に示す節によって言及されているように、それらは本来のイスラームに属する者たちによって守られなければならないのです。：

“・・・正しく仕えるとは、アッラーと最後の（審判の）日、天使たち、諸啓典と預言者たちを信じることである・・・” (クルアーン2:177)

またこのことは、預言者ムハンマド（彼に神の称賛あれ）の言葉によっても触れられています：

“信仰とは、神を信じ、諸天使、諸啓典、諸預言者、そして最後の日を信じることである・・・” (サヒーフ・ムスリム)

それでは次に、信仰における様々な側面に対するシーア思想の信条と、そしてそれがいかに本来のイスラームとは信条を異にしているかということに関して、ごく僅かな一例を挙げて行きましょう。

## 神への信念

神への正しい信念、または信条は、イスラームにおいて最も重要な側面であると言えます。ムハンマドは預言者として遣わされた最初の13年間、人々の神に対する間違っただ信念を正し、そして天使、預言者、聖人、殉教者、木々、石、星、偶像などの神以外の何ものかに祈願することに対して警告したのです。つまり彼は、全ての創造主である神のみが崇拝に値することを明確にしました。この期間においては戒律や崇拝方法に関する啓示は余り下されませんでした。つまりクルアーンの大半においては、この信条について取りざたされていることになります。神はクルアーンの中で、かれ以外の何かに祈願することは、火獄による永久の懲罰に値すると述べています：

**“およそアッラーに何ものかを配する者には、アッラーは樂園（に入ること）を禁じられ、かれの住まいは業火である。”（クルアーン5:72）**

これはイスラームにおいて決して譲歩することの出来ない信条であり、人がイスラームの枠組内に留まっていられるための大原則なのです。しかしながら私たちは、シーア信奉者たちがアッラー以外の何かを畏敬するのを見出します。また彼らがアリーやフセイン、ファーティマ、その他彼らのイマームなど偉大な聖人や殉教者らに節度を越えた畏敬の念を払い、そして必要となれば彼らに直接祈願する姿を認めます。シーア信奉者たちは、彼らには呼びかけに応じることの出来る能力があり、また彼らが神への仲介者となってくれることを信じていますが、イスラームではそういった信条を明確な不信仰として定めています[2]。神はこう仰っています：

**“苦難の際に祈る時、アッラー以外に誰がそれに答えて災難を除くのか。”（クルアーン27:62）**

シーア派が明らかに背反しているもう一つの重要な信仰箇条としては、神のみが全宇宙の諸事を司り、不可視の世界を知るという概念があります。シーア派では、それらの力を彼らのリーダーであるイマームと呼ばれる者たちに与え、彼らを諸預言者と諸天使の地位よりも高く位置付けています。神は仰っています：

**“言ってやるがいい。「幽玄界を知るものは、天地の間でアッラーの他にはないのである。」また彼らは、何時甦らされるか感知出来ない。”（クルアーン27:65）**

**“またかれが、恐れと希望の稲光をあなた方に示され、天から雨を降らせて、死んだ後の大地を甦らせられるの**

は、かれの印の一つである。本当にその中には、思慮ある者への印がある。”（クルアーン 30:24）

シーア信奉者は、これらの性質の多くを彼らのイマームに属させています。更に一部の者たちは、彼らには稲光を起こす力さえあるとも主張します<sup>[3]</sup>。

またシーア派において権威のあるテキストでは、このように述べられています：

“イマームたちには過去に何が起こったか、そして未来に何が起こるかの知識があり、何事も彼らからは隠されていない。”（アル＝クライーニー、カーフィーの書、260頁）

“イマームたちには全ての啓典の知識がある。それらの啓示がどの言語で下されたのかなどに関わりはないのである。”（同227頁）

“イマームたちは自分たちがいつ死ぬのかを知っており、また彼らが自ら選択しない限り死ぬことはない。”（同258頁）

“地上の全てはイマームたちの所有である。”（同407頁）

このようにシーア思想は多くの信仰側面において、本来のイスラームの教えから離れ去っているのです。

---

## Footnotes:

<sup>[1]</sup> *The Role of Zoroastrianism in the Development of Shiaism.*

<sup>[2]</sup> *Biha'r Al-Anwa'r, Al-Majlisi.*

このような途方もない信条は、彼らのイマーム（指導者）の一人による、次の発言からも見て取ることが出来ます：

“預言者ノア（彼に平安あれ）が洪水で溺れそうになった時、彼は我々の名において（つまり、イマームたちの名前）神に祈願し、呼びかけました。それゆえ全能なる神は彼を救い出したのです。預言者アブラハム（彼に平安あれ）が燃え盛る炎に投げ込まれた時もまた、彼は我々の名において神に祈りました。そして全能なる神は炎に対して冷たくなるよう命じることによって、彼（アブラハム）を助けたのです。また預言者モーゼ（彼に平安あれ）がその道中、彼の杖で海を打った時も、我々の名において神に祈願し、海を干上がらせたのです。そしてユダヤ人たちがイエス（彼に平安あれ）を殺そうと企んだ時も、彼は我々の名に触れることによって神に祈願し、死から免れたのです。神はそれから彼を天に召しました。”（ワサーイル・アッ＝シーア、4/1143）

<sup>[3]</sup> *Bihaar al-Anwar, Al-Burhan, and others.*

## 信仰証言

シャハーダ（信仰証言）— 神以外に崇拝に値するものはなく、ムハンマドはかれのしもべであり、使徒である（ラー イラーハ イツラッラー）— とはイスラーム第一の柱であり、イスラーム信仰を肯定する最重要な基幹でもあるのですが、シーア思想はここに関して相違点を見ます。この証言はイスラームにおける最も重要な側面であり、その全てが成り立っている土台ともいえる、独自の完全一神論と神への信念を具現化するものです。そしてその重要さは、預言者が死の床にある彼の叔父に対してその証言をするよう頼んだことからもうかがい知る事が出来るでしょう：

“叔父さん！私があなただけのことをアッラーの御前で弁護することの出来るよう、‘ラー イラーハ イツラッラー’と証言してください！”（サヒーフ・ブハーリー）

しかし結局のところ彼の叔父は、死の間際に先祖から伝わる宗教を変えることによって人々が彼に対してどう言うかを恐れ、その証言をしませんでした。そして彼の死後、預言者は啓示によって、彼が火獄の住人となったことを知らされたのです。

この証言とそれに必然的に伴うものの重要性は、預言者がそれを天国における永久の生命への手段の一つと定めたことを見ても知ることが出来ます。彼はこう言っています：

“死ぬ前に‘ラー イラーハ イツラッラー’と言い、それに忠実なまま死んだ者は、楽園に入るのだ。”（サヒーフ・ブハーリー）

こうしてこの証言はイスラーム第一の柱とみなされ、またそれによって人は信仰者となり、天国に入る機会を与えられるのです。

しかし、シーア信奉者にはこれとは異なった‘信仰証言’があります。以前の記事でも示したように、彼らは神以外のものを神と並べて配することによってその意味を否定するだけでなく、権威ある典拠には存在しないような原理を新たに付け加えたのです。彼らのシャハーダは、次のような供述となっています：“神以外に崇拝に値するものはなく、ムハンマドはかれのしもべであり、使徒である。そしてアリーはかれに愛された者、選ばれた者であり、預言者の後継者である。”<sup>[1]</sup>

この付加は、彼らとその思想の起源をそこに帰属させるところの、預言者ムハンマドの従兄弟アリーに関する極端な思想に由来します。更にシーア信奉者は、過去の諸預言者に下された啓示にさえもまた、

アリーは、預言者の教友たちの中でも最も敬虔な者の一人として知られていました。しかし預言者ムハンマドがその存命中に、彼を後継者として指名したという伝承はどこにも見当たりません。更にはシーア思想初期の著述を見てみると、彼ら自身この信条を、背教者アブドラー・ブン・サバアに帰しています。この人物は第三代カリフ・ウスマーンの暗殺を企み、更にはアリーが神自身であると主張した[5]男です。それゆえこれらの信条は、預言者ムハンマド（彼に神の称賛あれ）によって説かれたものではないことは明白であると言えます。

## 諸啓典への信念

神は諸預言者に啓典を啓示し、彼らはそれを人々に伝え、朗読したとクルアーンの中で述べられています。これら諸預言者と諸啓典の一部は、クルアーンによっても触れられています：

“言え、「私たちはアッラーを信じ、私たちに啓示されたものを信じます。またアブラハム、イシュマエル、イサク、ヤコブと諸支部族に啓示されたもの、モーゼとイエスに与えられたもの、主から預言者たちに下されたものを信じます。彼らの間の誰にも、差別をつけません。かれに私たちは服従、帰依します。」”（クルアーン 2:136）

“かれ（アッラー）は真理をもって、あなたに啓典を啓示され、その以前にあったものの確証とし、また（先に）律法（トーラー）と福音（ゴスペル）を下され、・・・”（クルアーン 3:3）

諸預言者こそが啓示を授けられたのであり、この事実によりムハンマド（彼に神の称賛あれ）が最後の預言者とされ、ゆえにクルアーン以後に新しく啓示が下ることはもう有り得ません。しかしながらシーア信奉者たちは預言者の逝去前に、‘ファーティマの碑板’と呼ばれるクルアーン以後の新しい啓示があったと信じているのです。そして彼らはその中に、将来彼らのイマームとなる人物たちの名前が記されていた、とさえ主張しているのです[6]。

彼らは、彼らが主張している見解をクルアーンの中に見出すことが出来なかったため、それらの概念を新たに生み出しました。彼らはそれだけに留まらず、クルアーンは完全な形では保存されておらず[7]、現在のクルアーンは不完全である、と大胆にもその信頼性に挑戦して

います。そしてその完全版は過去900年間‘洞窟’の中で大幽隠中の12代目イマームと共にあり、それはそのイマームが現れた際にもたらされるのだと主張しています[8]。ここで明確なのは、このような信仰が本来のイスラームの教えに真っ向から反しているということでしょう。神はご自身で直接、クルアーンの保護をはっきりと謳っているのですから：

**“本当にわれこそは、その訓戒を下し、必ずそれを守護するのである。” (クルアーン 15:9)**

シーア信奉者たちがクルアーンの変更を主張するのは、そこに彼らの主張する教義が全く含まれていないためです。このような視点を最初にあからさまに主張し始めた者の一人は、ミルザ・フセイン・ムハンマド・タキー・アン＝ヌーリー・アッ＝タブラシー（ヒジュラ暦1320年没）という人物であり、彼の著書The Final Verdict on the Distortion of the Book of the Lord of Lords[9]にはそれが記されています。

またシーア信奉者たちはその極端な信条ゆえに、クルアーンの中にアリー（彼に神の満悦あれ）のための章を新たに設けようと試みしました。それらの一つは、彼らが“継承の章”と呼ぶものです。



(Picture:“継承の章”。両側にペルシャ後の翻訳が付いています。)



## 諸預言者への信念

前述したように、イスラームでは諸預言者が人類における最良の者たちであり、神の教えを人類に広めるため、その卓越した品格において神によって特別に選び抜かれた者たちであることを説きます。神はクルアーンにおいて述べられています：

“アッラーは、天使と人間の中から、使徒を選ばれる。本当にアッラーは全聴にして全視であられる。”（クルアーン22:75）

また諸預言者は人類の中でも最良の者たちであり、生きる模範だったと述べられています：

“われが使徒を遣わしたのは、唯アッラーの御許しの許に服従、帰依させるためである。”（クルアーン 4:64）

しかしシーア信奉者は、彼らのイマームたちが諸預言者よりも優れていると信じており<sup>[10]</sup>、一部の預言者たちが高く称賛されたのは、彼らのイマームたちに対する愛情によるものだというのです<sup>[11]</sup>。

本来のイスラームの教えとは異なるシーア思想の信条の全てを枚挙するのであれば、本が何冊も必要となります。しかしながらこの短い記事によって、シーア思想はその信条において本来のイスラームの教えに忠実ではなく、むしろイマームとして知られる偏愛を受けた特定の指導者候補問題に関する極端な思想であると同時に、時代と共に変化していった外来信仰の雑多な組み合わせであるということも明らかになったことでしょう。全預言者によって説かれた教えである神のみへの崇拜と、神の預言者たちによって教えられた方法に基づいた生き方を教える宗教は、アリーへの愛のみに基づいた人生と存在、そして彼とイマームたちが指導者であるという主張に変化し、そしてそれらはイスラームの原典に対する追加や改竄、または偽りの陳述を試みるという行為に繋がったのです。更にまた創造物の成立、諸預言者の使命と諸啓典の啓示は、アリーとイマームたちの継承権のみを目的としており<sup>[12]</sup>、審判の日には神ではなく、彼らのイマームが人々を審判するのだとされてしまいました<sup>[13]</sup>。シーア思想にとって、天国や火獄に入る基準というのが何なのかは想像に難くありません。

彼らの主張する、預言者ムハンマド（彼に神の称賛あれ）の家族への愛に基づいた宗教は皮肉にも、彼によってもたらされた根本的教義とは離れたところへと彼らを導いてしまったのです。

## Footnotes:

[1] *Abdul Kareem Mushtaq.*

[2] アル=クライニー、カーフィーの書、 1/437

[3] *The Wilayat of 'Ali ibne Abi Talib (as), Answering Ansar.*

[4] “誰でもアリー以外のイマームを配し、アリーのカリフ就任を遅らせる者は多神教徒である。” (Al-Kafi fil-Usool, vol.10 p.55)

[5] *Rijaal al-Kishhi.*

[6] アル=クライニー、カーフィーの書、 1/527-8、その他多数。

[7] ウスール・カーフィー、 1:228

[8] *Al-Anwar al-Nu'maniah*, 2: 360-2.

[9] *Faslul Khitab Fi Tahreefi-Kitabi Rabbil Arbaab.*

[10] *Wasa'il As-Sheea.*

[11] *Bihaar al-Anwar* (26:267).

[12] *I'tiqadaat* (106-7)

[13] *Rijaal al-Kishhi* (337)